

# 高校と連携した地域活動の評価と 今後の学校教育のあり方についての一考察

松田 拓也<sup>1</sup>・新井 健司<sup>2</sup>・田中 雅紀<sup>2</sup>・森田 哲夫<sup>3</sup>

<sup>1</sup>正会員 前橋工科大学大学院建設工学専攻 (〒371-0816 群馬県前橋市上佐鳥町460-1)

<sup>2</sup>正会員 群馬県立藤岡北高等学校 (〒375-0017 群馬県藤岡市篠塚90)

<sup>3</sup>正会員 前橋工科大学環境・デザイン領域 (〒371-0816 群馬県前橋市上佐鳥町460-1)

E-mail:tmorita@maebashi-it.ac.jp

本研究の目的は、農業高校が取り組む地域活動の活動実績を整理し、生徒が講師を担うワークショップの参加者へのアンケート調査結果や関係者へのヒアリング調査により地域活動が生徒や地域住民に及ぼす影響について考察し、探求の時間の導入による今後の学校教育のあり方について検討することである。分析の結果、生徒や地域住民は世代の異なる交流に対して好意的であること、また地域活動が生徒の自信や意識の変化に繋がったことがわかった。また、農業高校が地域活動に取り組むには、高校側の理解、行政としての予算確保や公共空間の活用、地域住民の積極的な参加が求められる。そして、各々の繋ぎ役となるリーダーの存在が必要である。今後の学校教育のあり方として、学校というフィールドから地域というフィールドへ変化していくこと、そして地域活動から生まれる地域の愛着ややりがいこそがこれからの持続可能な社会に求められることであると考察した。

**Key Words :** *Agricultural High School, Regional Activity, Regional Cooperation,, School Education,*

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景

人口減少・少子高齢化に伴い、土木・農業の担い手不足が懸念されている。近年の日本の食糧自給率の低下や気候変動に伴う災害リスクの増大に対応するために、人材確保は急務である。

また、高校教育のあり方については、2022年度より高校のカリキュラムにおいて総合的な探究の時間が設けられるようになった。生徒たち自らが課題を発見し解決していくことを目標としているが、今までのように学校だけでなく、生徒自らが地域に出て、年齢や職業など多様な人たちとの交流を図っていくことが求められる。しかし、県立高校においては、県教育委員会に属するため、市町村との連携が薄いことが課題となる。

群馬県では、2009年より「花と緑のぐんまづくり」が開催され、毎年各市町で開催地を持ち回り、最終年である2021年まで計13回の開催となった。2020年開催の藤岡市では、準備段階から高校生による活躍が多く見られ、「花と緑のぐんまづくり」終了後も、レガシーとして高校生が地域や行政と連携した活動が続いている。

### (2) 既往研究と研究目的

本研究に関連する研究をレビューする。はじめに、行政が実施した花緑イベントにおける高校生の関わり方について、松田<sup>1)</sup>の研究がある。群馬県内の各市町を会場として計13回開催した花緑イベントで、各会場の実績および農業高校をはじめとした生徒の関わりをまとめ、関係者ヒアリングを行い、行政・地域・高校の役割について考察した。

地域活動については、新井<sup>2)</sup>の研究では、絶滅する恐れのあるヤリタナゴの保護活動において、農業高校や地域団体の活動実績、また生息数の変化をまとめている。環境の変化、団体の活動により生息数の変化にどのような関係があるかを定量的に示した。

産学官が連携した活動の研究では、森田<sup>3)</sup>の研究がある。駅周辺まちあるきマップを行政だけではなく、住民・学生参加型として作成を行った。学生が参加することにより、ワークショップに活気が生まれることや、大学においても実績となり、各々のメリットがあると述べている。また、大学の授業で地域をフィールドにすることが求められるとし、その課題として、フィールドの確保、学生の意欲の向上、指導者の確保、成果の実現性などの課題を挙げた。

今後の土木の担い手不足という課題に対し、産学官の連携による技術者育成について、長谷川<sup>4)</sup>の研究がある。

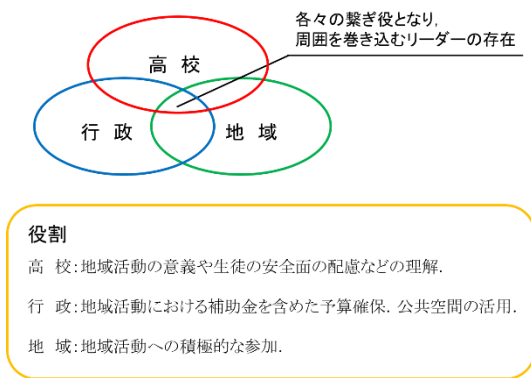


図-1 地域活動における連携と役割

地域の産学官において、地域の課題やニーズの共通理解を得ることを肝要とし、2008年から2012年までの間、計10回による研修会の開催、アンケート調査を実施している。

既往研究では、産学官の連携は見られるものの、高校生が地域活動の主体となっている事例が多くはない。高校生が活動の主体となることで、より地域の課題などへの意識の醸成が図ることができると考える。

以上を踏まえ、本研究の目的は、農業高校が取り組む地域活動の活動実績の経緯を整理し、生徒が講師を担うワークショップの参加者へのアンケート調査結果や関係者へのヒアリング調査により地域活動が生徒や地域住民に及ぼす影響について考察し、高校における探求の時間の導入による今後の学校教育のあり方について検討することである。

### (3) 地域活動における連携と役割

本研究では、地域活動における、高校・行政・地域の連携と役割を図-1のようにとらえる。本研究では、地域連携の効果を調査により把握する。特に、周囲を巻き込むリーダー役の存在に着目し考察する。

### (4) 本研究の進め方

本研究は、地域活動として、群馬県で行われた「花と緑のぐんまづくり」のレガシーとして、藤岡市の農業高校で始まった竹灯籠活動を対象とする。

はじめに、竹灯籠活動のきっかけや活動実績についてまとめる(2章)。次に、地域住民に向けて生徒が講師となったワークショップにおいて、参加者からのアンケート結果のまとめを行う(3章)。地域活動によって生まれた生徒の変化について、関係者へのヒアリング調査による評価を行う(4章)。最後に成果を総括するとともに、今後の高校教育における地域連携による活動のあり方について考察を行う(5章)。

## 2. 地域活動の概要

### (1) 竹灯籠活動のきっかけと活動理念

竹灯籠活動を始めるきっかけとなった、「花と緑のぐんまづくり」は、全国都市緑化フェアの理念を引継ぎ、「県民と力をあわせ花と緑あふれる、活力ある、美しい地域にする」ための事業として、2009年に群馬県が企画した事業である。1年ごとに順に県内各市町を会場とし、2021年の間に計13回実施された。この事業は、「花と緑のぐんまづくり推進協議会」による官民協働で実施、運営された。

藤岡市は、2020年の開催場所に選ばれたが、新型コロナウイルスの影響により、実質的な開催には至らなかった。しかし、前年に開催されたイベントや準備などでは高校生の活躍が多く見られた。

1章の既往研究で述べた、松田による研究では、関係者へのヒアリング調査結果として、「行政と連携した事業が継続して実施されることが生徒の経験に活かされる(高校教諭)や、「(花緑イベントの参加や役割の)経験を通して人と人とを繋ぐ仕事に就きたいと進路を考えるきっかけになった(農業高校生徒)」との回答があった。このことを踏まえ、高校教育において地域や行政と連携した活動を継続しようと、行政職員が業務外の活動として、2021年3月より竹灯籠活動を始動した。竹灯籠に着目した理由としては、農業高校での学習内容や活動内容に合わせたためである。

竹灯籠活動では、教育・地域・土木(農業)をコンセプトにしている。総合的な探求の時間の導入により、高校教育では今まで以上に地域の連携が求められている。また、生徒自身が地域の課題を発見し、解決していくうえで、実際に生徒自らが地域に出ていく必要がある。そのため、学校というフィールドだけでなく、地域全体をフィールドとして、活動をしていかなければならない。また、担い手が不足している、土木(農業)の分野において、活動(仕事)のやりがいや、地域・社会にどう貢献できるかを体験することで、その分野に進む可能性があると考えられることができる。

今回、竹灯籠の活動を行ううえで、次の4点を意識した。まず、「(1)芸術(アート)」として、デザインに正解を求めず生徒の各々の感性により制作を進める。次に、「(2)環境保全」として、プラスチック製品が竹製品の代用となり、放置竹林や竹害が問題となっているため、竹を伐採し活用することで、環境保全に繋げる。

「(3)人との交流」では、ワークショップの開催などを含めた活動全体をとおして、普段関わることがない多種多様な交流の機会を設ける。最後に、「(4)地域活性」として、展示などのイベントを実施し、地域ににぎわいを創出する。

表-1 竹灯籠活動実績

年	月	内容
2021	3	関係者打合せ・竹灯籠活動の実施決定
	6	説明会・ワークショップ開催
	10	竹の伐採
	11	文化祭に向けた制作・文化祭展示
2022	4	説明会・ワークショップ開催
	6	全国一斉点灯イベントのキックオフ会
	7	全国一斉点灯イベントの会場打合せ
	8	竹の伐採
		一般向けワークショップ開催 (講師を生徒が担う)
	9	全国で竹灯籠活動をしている高校生とWebによるミーティング
		全国一斉点灯イベント(点灯期間9/18~9/25)
	10	藤岡市文化財保護課主催のワークショップに講師派遣
12	藤岡市内の神社に竹灯籠展示(点灯期間12/31~1/3)	

## (2) 竹灯籠の活動実績

2021年3月より始動した竹灯籠活動のこれまでの実績を表-1にまとめた。

2021年度は高校の授業として、農業高校の環境土木科ガーデニングコースの3年生の生徒が竹灯籠活動を実施した。6月の説明会・ワークショップでは、放課後に当該コースである4名が参加し、その後の活動についてのコアメンバーとなった。学校外の展示を考えていたが、新型コロナウイルスの影響もあり、活動自体が思うようにできず、予定した規模を縮小し文化祭での展示を目指し制作を進めた。10月には、竹の伐採を生徒中心に実施した。11月に高校の文化祭が開催されたものの、新型コロナウイルスの影響から学校外の一般者の入場ができなかったが、校内に生徒が制作した竹灯籠の展示や他の学科・コースの生徒を対象にワークショップを開催した。

2022年度では、授業としてではなく、課外活動として竹灯籠活動を実施した。昨年度の生徒は卒業したため、2022年度は1年生と2年生を中心に新たなメンバーで活動を進めた。4月に顔合わせを兼ねた説明会・ワークショップを開催した。9月に実施された全国一斉点灯イベント「みんなの想火」の群馬県会場のひとつとして、エントリーを行い、6月にはイベントに向けたキックオフ会(決起集会)を実施し、会場の選定やスケジュールなどを生徒や関係者と共有した。会場の選定については、生徒の意見から、多くの来場者が見込めるとして、「道の駅 ららん藤岡」に決定し、7月には生徒と会場の現地確認や担当者と打合せを行った。8月には生徒が講師を担う一般向けのワークショップを高校の実習室で実施し、2日間で合計38名が参加した。また、2021年度に竹灯籠活動を行った卒業生も数名参加し、卒業生同士の再会の場ともなった。9月には全国一斉点灯イベントに関わる

全国の高校生とwebによるミーティングを行い、全国の同世代の仲間と活動の進捗や制作方法などの意見交換を行った。9月18日の全国一斉点灯イベントでは、点灯式を行い、生徒が竹灯籠活動をとおして得られたことや想いを会場に集まった来場者へ伝えた。点灯式の様子は地元新聞に掲載された。10月には藤岡市文化財保護課が藤岡市内の養蚕文化施設である高山社跡のPRイベントとして、竹灯籠のワークショップを開催し、生徒が講師として参加した。12月は藤岡市内にある神社に12月31日~1月3日の参拝者がにぎわう期間の展示を行った。

## 3. 地域活動に関するアンケート調査の結果

### (1) アンケート調査の概要

2022年8月に実施した2回のワークショップの参加者にアンケート調査を行った。調査内容については、表-2、表-3のとおりである。なお、高校生を対象としたアンケートと一般(高校生以外)を対象としたアンケートで別の様式を使用している。

表-2 アンケート調査項目(高校生, 17名)

☐ 個人特性	(1)	性別
	(2)	学年・学科・コース
	(3)	地域活動やボランティア経験
	(4)	校外の地域の方との関わり方
	(5)	学科やコースの内容が自分に合っている
		高校生活に満足している
		自然や屋外活動が好き
		ものづくりが好き
文化・芸術に触れるのが好き		
人と話をすることや交流が好き		
	学校行事に積極的に参加している	
☑ 満足度		竹灯籠に関する説明
		竹灯籠の制作
		社会人との会話・交流
☒ 家族特性	(1)	家族構成
	(2)	環境保全・自然保護、省資源化に関心のある家族
		食事の栄養や食品の安全性に関心のある家族
		台風や地震などの災害の安全性に気をつける家族
		交通安全や防犯に気をつけている家族
		地域の活動や祭りに熱心な家族
		慣習や礼儀を大切にする家族
	(3)	保護者の方とどのくらい会話をしますか
		SNSやメールでどのくらい連絡を取りますか
		朝ごはんか晩ごはんを保護者と一緒に食べますか
休日には保護者と外出しますか		
	総合的にみて保護者との交流は	
☑	ワークショップに関する感想や意見	

表-3 アンケート調査項目（一般、21名）

Ⅰ 個人特性	(1)	性別・年齢
	(2)	職業
	(3)	地域活動やボランティア経験
	(4)	地域の方との関わり方
	(5)	職業が自分に合っている
		今の生活に満足している
		自然や屋外活動が好き
		ものづくりが好き
		文化・芸術に触れるのが好き
		人と話をすることや交流が好き
		子どもや生徒との行事に積極的に参加している
子どもや生徒との行事に積極的に参加している		
Ⅱ 満足度	竹灯籠に関する説明	
	竹灯籠の制作	
	高校生との会話・交流	
Ⅲ 家族特性	家族構成	
	環境保全・自然保護、省資源化に関心のある家族	
	食事の栄養や食品の安全性に関心のある家族	
	台風や地震などの災害の安全性に気をつける家族	
	交通安全や防犯に気をつけている家族	
	地域の活動や祭りに熱心な家族	
Ⅳ 地域活動等	(1)	地域活動やボランティア活動の楽しみ・喜び
	(2)	地域活動やボランティア活動の苦勞・問題・心配
	(3)	他に活動している地域活動やボランティア活動
	(3)	他に活動している地域活動やボランティア活動
Ⅴ 感想等	(1)	「竹灯籠ワークショップ」に参加したきっかけ
	(2)	高校生と一緒に活動してどう感じたか
	(3)	「竹灯籠ワークショップ」の感想や意見

高校生を対象にしたアンケートでは、参加者の個人特性は、図-2のとおりであった。このことから、ワークショップに参加した生徒は、日頃から活動に前向きであることがわかる。

また、ワークショップの満足度（図-3）については、参加した生徒のほとんどが説明や制作に「とても満足した」と回答したとともに、社会人との会話・交流も満足度が高かった。

記述式の感想については、講師を担った生徒から、「いろんな人と関わってよかったです。」「とても楽しく作っているのをみてとてもうれしかったです。自分をもっと上手におしえられればなと思いました。」「ワークショップで教える側になってみて、楽しく竹灯籠をつくることができてよかったです。人とコミュニケーションをとりながらの作業は良いものだと思います。」といった声があった。講師としてではなく制作に参加した生徒からは、「物作りをするのは苦手ですが、今回竹灯籠を体験してみて、楽しくでき、物作りが少し得意になったので良かったです。」など活動における自

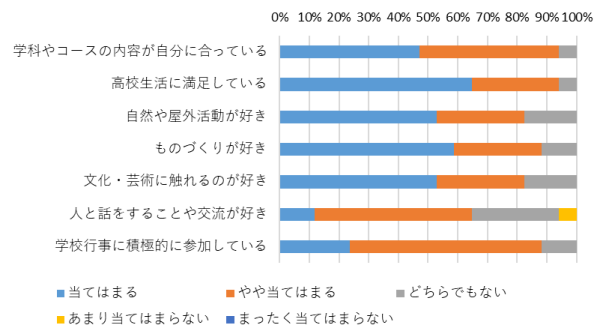


図-2 個人特性（高校生）

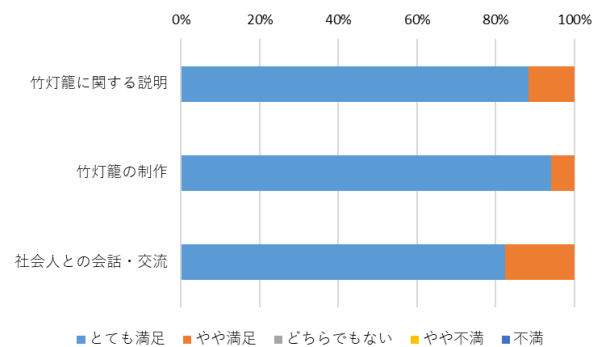


図-3 ワークショップの満足度（高校生）

信や、「竹用ドリルで穴を開けることがしっかりできてよかった。また、ららんにかざられるということで、この機会にららんに行ってみようと思いました。」「初めてだったけど説明もわかりやすく、楽しむことができた。ららんにかざられたら観に行きたいと思いました。」といった展示会場に足を運ぶきっかけにも繋がった。

一般の参加者向けのアンケートでは、個人特性（図-4）を見ると、高校生アンケート結果同様、日頃の活動に前向きな傾向が見られるものの、「子どもや生徒との行事に参加している」については、当てはまる人の割合が他の項目と比較し少なかった。

ワークショップの満足度（図-5）では、説明や制作、また高校生との会話・交流の満足度が高かった。個人特性からは、「子どもや生徒との行事に参加している」に当てはまる割合が少なかったものの、実際に生徒と関わることに対しては、好意的であることがわかる。

記述式の項目については、抜粋した回答を表-4にまとめた。参加者は地域活動やボランティア活動の楽しみや喜びとして、人との繋がりや学びの機会を挙げている。逆に苦勞や問題としては、初めて参加する活動への不安や活動の周知不足などが挙げられた。ワークショップに参加したきっかけは、友人や知人をとおしてが多く、その理由は新型コロナウイルスを懸念し、今回のワークショップでは広く周知せず、生徒や行政職員が直接声を掛けて参加者を募集したからである。高校生との活動につ

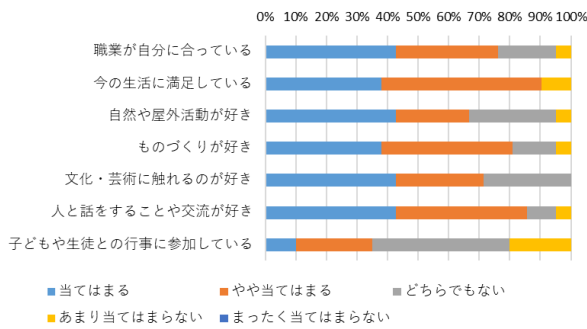


図4 個人特性 (一般)

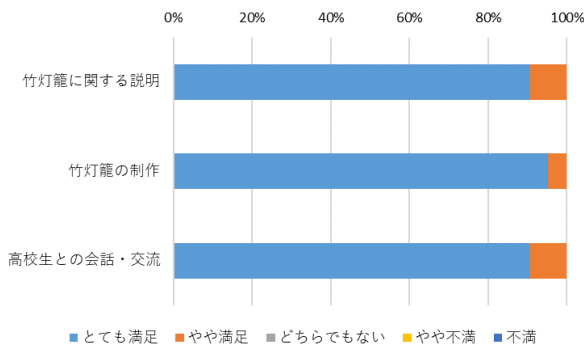


図5 ワークショップの満足度 (一般)

いては、講師を務めた生徒への賞賛の声や、制作についてだけでなく、様々なことを会話しながらワークショップを進めていたことがわかる。全体をとおした感想では、制作だけでなく、生徒や参加者同士の交流についても満足したことがわかった。また、制作に入る前の説明として、竹を伐採し活用することで竹害被害による環境問題への対策にも繋がることを伝えたと、環境問題を意識して取り組んでくれた参加者もいた。

#### 4. 竹灯籠活動における地域連携に関する評価

##### (1) 関係者へのヒアリング調査方法

前章のアンケート調査では、ワークショップ時点の生徒の声であるが、9月の全国一斉点灯イベント、10月の藤岡市文化財保護課主催のワークショップなど活動全体をとおした感想を生徒、担当教諭、行政職員にそれぞれヒアリングを実施した。生徒へのヒアリング内容については、4名の生徒に「竹灯籠活動をとおしての感想」、「活動による自身の変化」、「大人と関わってみてどうだったか」、「今後の活動について」を中心にヒアリングした。担当教諭、行政職員については、「活動をとおして生徒の変化」、「今後の活動について」をヒアリングした。

表4 アンケート調査 (一般) 記述項目

<p>④地域活動やボランティア活動について</p> <p>(1)地域活動やボランティア活動の楽しみ・喜び</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会における自分の立ち位置を知ることや関わっているという実感がえられること。</li> <li>・新しい出逢いと、様々な学びの機会を頂けること。知らなかった自分の可能性を発掘できること。</li> <li>・家族、職場以外で交流ができること。</li> </ul> <p>(2)地域活動やボランティア活動の苦勞・問題・心配</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加者の確保。</li> <li>・初めてだと参加するのに勇気がいる。</li> <li>・どこで行われているかなどの情報が少ない為、気付きにくい事です。</li> </ul> <p>(3)他に活動している地域活動やボランティア活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特になし。</li> <li>・地域の草かり、清掃活動、はいひん回収。</li> <li>・高校生の進路相談。</li> <li>・保育園・児童館での子供との交流。</li> <li>・災害支援活動。</li> </ul>
<p>⑤ワークショップの感想等</p> <p>(1)「竹灯籠ワークショップ」に参加したきっかけ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友人の紹介。</li> <li>・知人の紹介。</li> <li>・職場の先輩に紹介されたから。</li> </ul> <p>(2)高校生と一緒に活動してどう感じたか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・丁寧に教えていただき、楽しみながら竹灯籠を作ることができた。また、母校なので少し懐かしさを感じた。</li> <li>・高校生に教わりながら作業する事がないため、新鮮に感じました。</li> <li>・竹灯ろう以外にも学校のことなどいろいろ話してくれて楽しかった。教えるのも上手だった。</li> </ul> <p>(3)「竹灯籠ワークショップ」の感想や意見</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・こんなに竹灯籠が簡単に作れるとは驚きでした！ららん藤岡でのライトアップ、楽しみです。</li> <li>・普段の生活では触れることの無かった竹灯籠を作ってみて、作業も楽しんで作っている自分も発見できた。とても楽しく作れて、とても充実した時間でした。</li> <li>・地域の方々との交流がもてた有意義な時間でした。ありがとうございました。</li> <li>・ただものをつくるだけでなく、地域や環境に結びつく活動でやりがいがあった楽しかった。</li> <li>・思っていたより楽しかった。子どもも楽しかったようで満足です！</li> </ul>

※原文のまま

##### (2) ヒアリング調査結果

ヒアリング調査結果は、表5のとおりである。

生徒は、竹灯籠活動を行う前は地域活動に参加することはなかったので良い経験になったという意見が共通していた。また、大人の印象については活動前と活動後で変化があった。おそらく、日頃、家族や先生など限られた大人としか関わる機会がないため、生徒にとって新たな経験であったと考える。今後の活動については、前向きに考えている生徒が多く、生徒自身の声から、竹灯籠活動が生徒の成長に繋がったと言える。

担当教諭からは、「生徒の主体性を育て、地域における自分の存在意義や自己有用感に繋がっている。」との

表-5 ヒアリング調査結果

生徒A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リーダーとしてのプレッシャーがあっただけで、自分でもリーダーができるという自信になった。</li> <li>・活動の前後で、人との関わり方が変わった。終わったあとやりがいを感じた。</li> <li>・今まで地域の人や大人と関わる機会はなかったけれど、大人の印象はワークショップの大人は話しやすかった。</li> <li>・今後も違う活動でリーダー役をやっても良いかなあと思う。</li> </ul>
生徒B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今まで地域と関わる活動をしてこなかったから良い経験になった。</li> <li>・最初はコミュニケーションが苦手だったけれど、大人や地域の人と関わることで話を広げられるようになった。</li> <li>・表に出る活動をあまりしてこなかったけれど、この活動をとおして他の活動でも表に立って活動したいと思った。</li> </ul>
生徒C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の人と関わる機会がなかったから良い経験になった。</li> <li>・最初はやりがいのある活動とは思わなかったけれど、地域の人たちと交流してやりがいがあると思えた。</li> <li>・ワークショップでは、今まで大人に教えることがなく、難しかったけれど楽しくもあった。</li> <li>・大人は怖い印象があったけれど、優しい印象に変わった。</li> <li>・色々な人と交流できるから今後もこのような活動をやってみたいと思う。</li> </ul>
生徒D	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しかったけれど、夏休みに学校に来るのは大変だった。</li> <li>・人との関わり方が苦手だったけれど、関わり方を学ぶことができた。</li> <li>・大人と関われることは良い経験だったし、地域活動に興味がある人もいることを学んだ。</li> <li>・以前より、物事を教えることが上手できるようになった。</li> <li>・今後も竹灯籠をやっていききたい。</li> </ul>
担当教諭	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の変化として、様々な年齢や立場の人と交流することで、生徒の意識の広がりを感じた。「言われたことをやる」から「自分を表現できる」ようになり、自分の意見を持って行動するようになった。</li> <li>・地域や大人との関わりが生徒にどう影響していくかは、生徒の主体性を育て、地域における自分の存在意義や自己有用感に繋がっている。また、学校で学ぶ目的を見つけるきっかけにもなる。</li> <li>・他の先生からは、学校のひとつのウリであり、特色ある活動との声があった。</li> <li>・今後について、地域との関わり方や活動内容が広がるように発展させていきたい。</li> </ul>
行政職員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動を始めた頃は、人前で話す際に緊張していた様子だった生徒が、ワークショップで講師を担うなどの経験をとおして、9月の点灯式では来場者の前で堂々と自分の想いを語る事ができた。</li> <li>・生徒が主体的に活動を行える機会を設けるためには、地域の大人の協力や高校側の理解、そしてその間の繋ぎ役を担うキーとなる存在が必要であると感ずる。</li> <li>・約7ヶ月程度の活動ではあったが、生徒の成長を間近で感じることができ、さらに地域の大人も生徒からの学びがあったことから、今後も活動を続け発展させていきたい。</li> </ul>

ヒアリング日：2022年12月8日

声や、生徒の変化として、「自分の意見を持って行動するようになった。」との声があった。今回の竹灯籠活動において、企画段階から生徒が関わり、ワークショップの講師を生徒が担うなどの経験により、生徒の主体性を育めたのではないだろうか。

行政職員からは、生徒が成長していく様子や活動全体をとおして、「生徒が主体的に活動を行える機会を設けるためには、地域の大人の協力や高校側の理解、そしてその間の繋ぎ役を担うキーとなる存在が必要であると感ずる。」との声があった。学校教育における地域活動は生徒の安全面などの観点から、高校側の理解がなければ成り立たない。また、高校側が地域活動を求めても地域住民の協力がなければ活動ができない。前章のアンケート調査の回答では、地域活動について情報が少なく気付きづらいという課題もある。そういった地域と高校の間を繋いでいく役が必要不可欠である。

## 5. まとめ

### (1) 地域連携活動の効果

2021年3月から始まった竹灯籠活動の実績をまとめ、ワークショップでのアンケート調査では、生徒や一般参加者の声から、ものづくりにおける満足度や、普段関わることが少ない年代との交流の満足度が高いことがわかった。また、地域活動・ボランティア活動の楽しみとして、新しい出会いと様々な学びという意見が挙がった。今回のようなワークショップにおいては、参加者が普段経験しないことを、参加者同士、または普段関わる人が少ない年代の人と交流しながら行うことが、地域活動・ボランティア活動への楽しさに繋がると考える。

ヒアリング結果からは、今回の竹灯籠活動が生徒自身の成長や、今後の活動に対して前向きに考える機会となった。このことは、普段の学校内だけでの授業や活動などでは難しいと考える。今回、生徒の成長に繋がった要因として次の3つが挙げられる。1)多種多様な人たちとの交流、2)生徒が教えるという経験、3)長期間での活動である。短期間での活動ではなく、長期間での活動とすることで、生徒自身が目標設定やスケジュール管理を行い、活動が終わったあとの達成感に繋がっていくと考えられる。また、行政職員からのヒアリングでは、図-1にあるリーダー役の存在について触れていた。今回の活動では、行政職員により、高校や行政の担当部署との連絡調整や、生徒による会場確認前に会場管理者への事前の相談、ワークショップへの参加呼びかけなどを行っている。このことから、今回の活動において、「各々の繋ぎ役となり、周囲を巻き込むリーダーの存在」が見受けられた。

今回の活動での対外的な評価としては、2章の活動実

績にも記述したが、点灯式の様子が地元新聞に記載されたことが挙げられる。また、高校が応募した公益財団法人の環境教育賞において、今回の活動が優秀賞を受賞している。その他にも、会場の管理者から生徒への賞賛の声や、市民からの差し入れなどがあったことから、生徒の活動を地域に周知する機会にもなった。

本研究では、アンケート調査による定量的評価を予定していたが、サンプル数が少ないこと、回答にバラつきが少ないことから、定量的評価を行うことが困難であった。しかし、アンケート調査の記述部分や、生徒などへのヒアリングなど定性的評価から、本研究の目的に繋がったと言える。

## (2) 地域連携活動からみた学校教育のあり方

1章の研究仮説で述べた、高校・行政・地域の役割のモデルについては、概ね本研究により検証することができた。高校の役割として、授業や他の課外活動で生徒や教諭が忙しいなか、地域活動への関わりを受け入れ、生徒の安全面にも配慮があり、事故等が無く活動を行うことができた。行政の役割として、予算確保であるが、今回の活動では、県の補助金を高校が申請し活用した。今後は、公園での展示など公共空間の活用についても検討していきたい。地域の役割では、ワークショップへの参加や点灯式への来場などがあった。より多くの地域住民の参加のために、活動に関する情報の周知や、初めての参加者でも参加しやすい場づくりについて今後意識していく必要がある。

少子化に伴い、高校は生徒数確保のための取り組みを進めている。総合的な探求の時間の導入は、各々の高校において特色ある活動へと展開していくことが予想される。生徒にとっては、今まで以上に地域の課題やその解決策について主体的に取り組むことが求められる。

「学校というフィールドから、地域というフィールド

へ。」、このことが地域への愛着の醸成や高校で学んだことを地域で活かすというやりがいへと繋がっていく。そして、生徒が活動をとおして得られる、地域の愛着ややりがいこそが、今後の持続可能な社会に向けて学校教育に求められることであると考察する。

## (3) 今後の研究課題

本研究を通じ、今後の研究課題として以下が考えられた。

- 1) 地域活動に参加した生徒だけでなく、参加していない生徒にも意識調査を行い、活動による成果を定量的に評価していくことが課題と考える。
- 2) 今回の活動に参加した生徒がその後どのような取り組みを進めていくかをモニタリングしていくことが課題と考える。
- 3) 本研究では、高校生を中心とした研究を進めていたが、地域住民の目線から評価していくことが課題と考える。

## 参考文献

- 1) 松田拓也, 塚田伸也, 山田真次, 森田哲夫: 「花と緑のぐんまづくり」の開催特性と地域連携の評価に関する一考察, 土木計画学研究発表会講演集, 17-1, 2021
- 2) 新井健司, 森田哲夫, 齊藤裕也, 守山拓弥: ヤリタナゴ保護活動の変遷と生息状況に関する考察—群馬県藤岡市における保護活動を事例に一, 実践政策学, 第8巻第2号, pp.223-234, 2022.
- 3) 森田哲夫, 篠原良太, 塚田伸也: 自治体と大学の連携に基づく住民・学生参加による「まち歩きマップ」制作, 実践政策学, 第2巻第1号, 2016
- 4) 長谷川明, 竹内貴弘, 阿波稔, 金子賢治, 鈴木拓也, 迫井裕樹: 地域の産官学連携による土木教育に関する研修会活動, 土木学会論文集 H (教育), Vol.70, No.1, 13-27, 2014

## A STUDY ON THE EVALUATION OF REGIONAL ACTIVITIES IN COOPERATION WITH HIGH SCHOOL AND CONSIDERATION OF SCHOOL EDUCATION

Takuya MATSUDA, Kenji ARAI, Masaki TANAKA and Tetsuo MORITA